

Journal of Occupational Science(2019) 第 26 卷 1 号

2019年発行の第1号は、「Transition (移行, 節目を意味する)」に焦点を当てながら作業の複雑さを論じる論文を掲載する。作業科学は、個人のレベルから社会的レベルにおける作業の複雑さの解明に挑戦している。編集者の Rudman によると、作業の複雑さを知る方法として「移行」に焦点を当てる必要がある。以下に、移行が様々な世代や社会の変化という状況でどのように健康・健康感に影響するかを述べた論文を紹介する。

Keptner (2019)は、アメリカの大学における退学者や問題を持つ学生の増加を研究背景として、大学生の作業遂行指数と適応の関係を検討した。結果、作業遂行と作業遂行満足度には相関があり、日常作業の遂行満足度が高い程に大学への順応が高いことが示唆された。

Voss ら (2019)は、高齢期の失業は退職生活に思わぬ影響を及ぼすことを示した。失業も不本意な退職による作業の中断も身体的、精神的な健康の悪化に繋がると考え、高齢者にインタビューを行った。失業中の作業選択や自律性はレジリエンスに貢献し、失業中における生産活動や意味のある作業従事は目的的作业となり健康に貢献することが明らかとなった。生産活動や目的の考え方を再考する必要性を提案している。

Morville & Jessen-Winge (2019) は、亡命希望者は社会的排除を経験するので、その人たちのソーシャルインクルージョンを検討する必要があると考え、手記とインタビューを分析した。結果、嘗て Bogeas (2017) が提示したソーシャルインクルージョンの概念を利用し、亡命センターで経験される問題を明確にし、協業的かつ参加型のアプローチがソーシャルインクルージョンと作業への参加の機会を提供することを示唆した。

Larsen, Hounsagaard, Brandt, & Kristensen (2019) は、高齢者の作業に支援技術を取り入れるプロセスを検討するために、高齢者の経験を分析した。Doing (支援技術を使って日常的な作業をすること) は、支援技術を学び、価値のある作業を繰り返すというプロセスを進め、高齢者の being (作業的存在) に影響を及ぼし、人々や場所とつながることで Belonging (所属) を促すことを示した。

Steel (2019) は、オーストリアの公的支援技術プログラムを利用していない人々の経験と彼らの支援技術へのアクセス状況、作業選択、経験を調査した。支援技術を活用することは自己管理の一部として継続的学習と問題解決を必要とする作業であることが明らかとなった。そのための必要条件として、選択肢に気づくこと、新たな製品やスキルの探求と経験にサポートがあること、好みが尊重されること、継続的サービスが保証されることが含まれ、どのように障害ある人の参加と選択が優先されるかを理解することが重要であることが示された。

本号では、移行 Transition における人々の作業の経験と影響を理解するとともに、クライアントの作業を支援するためには、移行に適用していくためのシステムや方略を、作業の視点で理解する必要性を提案している。これらは作業科学を学ぶ上で重要な視点であり、多く

の方に読んでいただきたい。

馬場博規（磐田市立総合病院）,小田原悦子（フリーランス）

文献（引用順）

- Keptner, K. M. (2019). Relationship between occupational performance measures and adjustment in a sample of university students. *Journal of Occupational Science, 26(1), 6-17.*
- Voss, M. W., Merryman, M. B., Crabtree, L., Subasic, K., Birmingham, W., Wadsworth, L., & Hung, M. (2019). Late-career unemployment has mixed effects in retirement. *Journal of Occupational Science, 26(1), 29-39.*
- Morville, A., & Jessen-Winge, J. (2019). Creating a bridge: An asylum seeker's ideas for social inclusion. *Journal of Occupational Science, 26(1), 53-64.*
- Larsen, S. M., Hounsgaard, L., Brandt, Å., & Kristensen, H. K. (2019). "Becoming acquainted": The process of incorporating assistive technology into occupations. *Journal of Occupational Science, 26(1), 77-86.*
- Steel, E. J. (2019). Understanding assistive technology as a pre-requisite for choice and participation. *Journal of Occupational Science, 26(1), 87-98.*

Journal of Occupational Science (2019) 第26巻 2号

第26巻第2号には、ヨーロッパ作業科学カンファレンス2017に関する特集論文やアイデンティティ、作業的挑戦などをテーマにした論文が含まれていた。本書評では、特集論文3編、アイデンティティに関する論文3編についてその概要を紹介する。

ヨーロッパ作業科学カンファレンス2017について、Zemke (2019) は、国際的な参加者たちが作業科学の変革と変化について、従来のそして発展しつつある概念をめぐって交流する機会となったとし、個人的回想を論じている。Rudman (2019) は、2017年のヨーロッパ作業科学学会の中で行った「作業科学において批判的転換を活用する：貢献と今後の可能性」というテーマの基調講演に先行する議論の概要を述べた上で、「多様性の出会い」がどのように批判的気づきを促したかを考察している。Roberts (2019) は、ヨーロッパの文脈における作業科学の発展とヨーロッパにおける作業科学の誕生に重要な出来事や組織について述べている。

次に、アイデンティティに関する論文についてである。Schneider, Page, & van Nes (2019) は、4名の成人ドイツ人トランスジェンダーによって経験される作業的移行をより良く理解するために、ナラティブアプローチを用いた研究を行った。参加者たちがトランスジェンダーアイデンティティの発達中に行った作業は、彼らのジェンダーの移行との関わりで、特定の作業に変化し、最終的に彼らの感じるジェンダーの作業的生活になった

ことが示された。

Booth, Rihtman, Wright, Taylor, & Price (2019) は、身長が多様性が日々の作業への参加にどのように影響するかに関して、超高身長の英国人の若者の作業のナラティブを調査した。その結果、「平均的な身長の世界に合わせる」と「強みを発揮する」という上位2つのテーマが得られ、身長が高いことが肯定的にも否定的にも作業選択に影響を及ぼし、それがアイデンティティを形作ることが示唆された。

Tatzer (2019) は、長期ケア施設に入所する中等度から重度の認知症を有する男女がアイデンティティと社会的役割をどのように維持するかについて調査した。その中で対象者らは、認知面や身体面の障害に関わらず、アイデンティティを表現するためにナラティブ、物、そして作業を使っていた。この研究を通して Tatzer は、narratives-in-action (行為の中のナラティブ) のアプローチは、言語的に自分自身を表現することが困難な認知症を有する人々の視点をより理解できる可能性を示唆している。

本号を通して、主にヨーロッパにおける作業科学の変化や発展の歴史的過程と今後の展望を学ぶことができると思われる。また、多様な状況における人々のアイデンティティを理解することにも役立つと考える。

鹿田将隆 (常葉大学), 小田原悦子 (フリーランス)

文献 (引用順)

- Zemke, R. (2019). OS, OT and Me: Personal reminiscences inspired by the 2017 Occupational Science Europe conference. *Journal of Occupational Science*, 26 (2), 156-164.
- Rudman, D. L. (2019). Engaging the occupational imagination: Meeting in diversity. *Journal of Occupational Science*, 26 (2), 165-172.
- Roberts, A. E. K. (2019). Prominent people and events in the development of occupational science in Europe: A personal perspective. *Journal of Occupational Science*, 26 (2), 173-180.
- Schneider, J., Page, J., & van Nes, F. (2018). Now I feel much better than in my previous life”: Narratives of occupational transitions in young transgender adults. *Journal of Occupational Science*, 26 (2), 219-232.
- Booth, J., Rihtman, T., Wright, S. L., Taylor, M. C., & Price, M. (2019). Height matters: The experiences of very tall young British adults in relation to managing everyday occupations. *Journal of Occupational Science*, 26 (2), 233-244.
- Tatzer, V. C. (2019). Narratives-in-action of people with moderate to severe dementia in long-term care: Understanding the link between occupation and identity. *Journal of Occupational Science*, 26 (2), 245-257.

Journal of Occupational Science (2019) 第26巻3号

Simaan&Nayar (2019)によると、2018年5月に南アフリカのケープタウンで開催されたWFOT世界会議の基調講演者 Elelwani Ramugondo は、複合的な脱植民地主義の立場（植民地主義の罨が残る状況を批判する）から Global South（南アフリカを含む南の低開発のコミュニティー）の人々の声に耳を傾けることが、多様な作業の見方を推し進める機会となると提唱した。その考えを受け継ぎ、第26巻3号の7論文は、従来の作業科学者が優位な植民地主義的立場にあったこと、さらに、Global South の社会変革のために作業科学にさらに批判的視点を求める。学者、実践家、一般市民として、作業科学者に社会変革の活動家である必要性を訴える。

Kiepek, Beagan, Rudman,& Phelan(2019)「認可されない作業：不健康、違法、逸脱の作業の沈黙」は、窃盗の分析から、鍵概念『逸脱』、『覇権』、『抵抗』を導いた。作業科学者は優位な社会的価値、考え方、覇権に偏った研究や論説の偏った見方を修正し、現在の社会で認められない作業を批判的視点で研究する必要を強調した。

Nicholls &Elliot(2019)「作業の影：人種差別、恥、悲哀」は、黒人研究参加者（他者）をリサーチする研究者の経験を精神分析、批判的人種理論、黒人女性理論から探り、人種差別や白人の罪などのこれまで意識されなかった側面を内省する必要を説く。

Sunday, Ramugondo,& Kathard(2019)「作業意識の一形態としての専門職の役割違反」は、権力と弾圧関係における人間と行為とは何かを「もっと意識する」ために、専門職の役割違反を探り、構造的な権力と作業意識への批判的視点の必要を示した。

McAdam, Franzsen, &Casteleijn(2019)「南アの田舎の資源不足のコミュニティーの作業を確認する」は、この地域の資源不足による作業参加の不公正を指摘した。

George &Stanley(2019)「人身売買の作業的不公正」は、人身売買が及ぼすウェルビーイング、個人の作業権への否定的影響を指摘した。

Bartolac &Sangster(2019)「身体障害のある人々の日常の経験を理解する：社会的作業的参加モデルの構築」は、作業剥奪と社会的辺縁化は教育、公的施策、健康、社会的介護など個人のレベルで経験されることを示した。

Schalkwyk ら(2019)「刑務所内の乳児の作業の見方」は、現在の施策と環境の齟齬が乳児の作業従事を阻害し、健康とウェルビーイングを脅かすことを指摘した。

7論文には2点の興味深い特徴があった。第1に、これまで注目されなかった作業の特徴を作業科学の視点を使って明らかにしたこととである。2つ目は、従来の作業科学の研究者のスタンスを越え、Ramugondo が強調した脱植民地主義のように、Global South の人々を作業的存在として理解できるように作業科学を広げるために、さらなる批判性が必要とされることを提示し、新規な立ち位置が提言された点である。

書評：小田原悦子（フリーランス）

文献 (引用順)

- Simaan, J., & Nayar, S. (2019). Editorial: WFOT special issue. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 337-340. doi:10.1080/14427591.2019.1620620
- Bartolac, B., & Sangster Jokić, C. (2019). Understanding the everyday experience of persons with physical disabilities: Building a model of social and occupational participation. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 408-425. doi: 10.1080/14427591.2018.1522597
- Kiepek, N.C., Beagan, B., LaliberteRudman, D., & Phelan, S. (2019). Non-sanctioned occupations: Silences around activities framed as unhealthy, illegal, and deviant. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 341-353. doi: 10.1080/14427591.2018.1499123
- McAdam, J. C., Franzsen, D., & Casteleijn, D. (2019). Identification of occupations in a South African rural less-resourced community. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 379-393. doi: 10.1080/14427591.2019.1614476
- Nicholls, L., & Elliot, M. L. (2019). In the shadow of occupation: Racism, shame and grief. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 354-365. doi: 10.1080/14427591.2018.1523021
- Sunday, A., Ramugondo, E. L., & Kathard, H. (2019). Professional role transgression as a form of occupational consciousness. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 366-378. doi: 10.1080/14427591.2019.1630852
- van Schalkwyk, M., Cronjé, C., Thompson, K., Steyn, T., Griessel, I., Outram, M., Faywers, S. (2019). An occupational perspective on infants behind bars. *Journal of Occupational Science*, 26(3), 426-441. doi: 10.1080/14427591.2019.1617926

Journal of Occupational Science(2019) 第 26 卷, 第 4 号

Journal of Occupational Science 第26巻,第4号には,2018年のRuth Zemke Lectureを含む9編の論文が掲載されている.編集者のHocking(2019)によると,世代の異なる人々や文化の異なる人々の間に共通して存在することがこの号の特徴である.具体的には,特定の作業の経験,痛ましい日常生活の崩壊後におこる移行経験,作業経験を明らかにする方法(研究法)である.著者たちは,日々のありふれた作業への従事の経験を,異なった観点から理解することを目指している.本書評では,4論文を中心に紹介する.

Wood(2019)はRuth Zemke Lectureとして,自身の経験を自ら報告できない,チンパンジーや高齢者や乗馬プログラムの馬の作業の研究から,環境・時間・作業の相互作用を明らかにした.本研究では,緊張・不安・フロー・混乱が,それ以上に経験するものが何も無いよ

うな完璧な状況を経験する機会をもたらすことを見出した。

Windmark & Fristedt(2019)は、作業科学において一般に用いられる子供と若者の作業の分類には経験的基盤が欠けているとの主張のもと、12-15歳を対象にdoingの経験についてインタビューを行った。先行研究と相関する多様な経験をカバーする8つのカテゴリーが明らかになった。Hocking (2019)によると、今後、異なる状況や年齢集団を対象にさらなる調査が必要だが、本研究は若い人々の作業従事を正当に評価するための革新的直接的視点である。

次に紹介するのは、解釈的現象学的分析を用いて、特定の作業がどのように経験されるか、探求した2論文である。Hocking (2019)によると、両論文は、人の作業遂行に対する実際の批判や承認的批判の影響、および、強制の作業経験への影響を議論する新たな領域を開く。

Rampley, Reynolds & Cordingley(2019)は、doing,being,becoming,belongingの概念を用いて、文芸とウェルビーイングとアイデンティティの関係性を探求した。アイデンティティの感覚の中核であり、たいていの人々によって経験される、創造的な作業として書くことを示すとともに、アイデンティティ感覚が参加者の拠り所であり、それゆえ他者の意見に敏感であることを明らかにしている。

Jones & Reynolds(2019)の研究では、60-69歳のボランティアを対象にしたインタビューを分析した。ボランティアに参加することは死別や退職などの移行に対処する為の支えとなっていた。その一方、求職手当を受給する条件としてボランティアを行う比較的若い参加者の1人に搾取が認知されたが、その他の人々は自発的に働いたと強調しており、Hocking(2019)は国家レベルの強制の可能性が作業的不公正の問題を高めているとする。

以上の4論文に加え、文化的観点から、Lee(2019)が日常的な行為に対するアジア人の視点に関するスコーピングレビューを、Dowersら(2019)がトランスジェンダーの人々の作業的経験に関するスコーピングレビューを報告している。また、Wagman ら(2019)が個人的視点から作業バランスを見るスコーピングレビューを、Stewartら(2019)が女性の人生に性的暴行が与える影響に関するナラティブレビューを報告している。Benjamin-Thomasら(2019)は、子供や若者の参加を促進するのに適するとされる参加型デジタル法について批判的レビューを報告した。

高木 信也（絃仁病院）小田原悦子（フリーランス）

文献（引用順）

Wood, W. (2019). Envisioning the environment, time, and occupation. *Journal of Occupational Science*,26(4) 456-469.

Widmark, E., & Fristedt, S. (2019). Occupation according to adolescents: Daily occupations categorized based on adolescents' experiences. *Journal of Occupational Science*,26(4) 470-483.

Rampley, H., Reynolds, F., & Cordingley, K. (2019). Experiences of creative

- writing as a serious leisure occupation: An interpretative phenomenological analysis. *Journal of Occupational Science*,26(4) 511-523.
- Jones, R., & Reynolds, F. (2019) The contribution of charity shop volunteering to a positive experience of ageing. *Journal of Occupational Science*,26(4) 524-536.
- Lee, B, D. (2019). Scoping review of Asian viewpoints on everyday doing: A critical turn for critical perspectives. *Journal of Occupational Science*,26(4) 484-495.
- Dowers, E., White, C., Kingsley, J., & Swenson, R. (2019). Transgender experiences of occupation and the environment: A scoping review. *Journal of Occupational Science*,26(4) 496-510.
- Wagman, P., & Håkansson, C. (2019). Occupational balance from the interpersonal perspective: A scoping review. *Journal of Occupational Science*,26(4) 537-545.
- Stewart, K. E., Mont, J, D., & Polatajko, H, J. (2019). Applying an occupational perspective to women's experiences of life after sexual assault: A narrative review. *Journal of Occupational Science*,26(4) 546-558.
- Benjamin-Thomas, T, E., Rudman, D, L., Cameron, D., & Batorowicz, B. (2019). Participatory digital methodologies: Potential of three approaches for advancing transformative occupation-based research with children and youth. *Journal of Occupational Science*,26(4) 559-574.